羅臼 UNESCO 世界遺産

知床半島は、2005 年に UNESCO 世界遺産となりました。その境界線には半島の中心部から最北端までが含まれており、それを取り囲む海域も含まれています。羅臼町の大部分が、この境界線に含まれています。ここを訪れた際は、野生生物観察ツアーに参加し、ビジターセンターで教育展示を見て、この地域が世界的に重要と見なされた訳を知ることができます。

ここの団体は、半島の重要性についてその陸生種や海洋生物に焦点を当てて説明しています。羅臼の森や山々はヒグマの高い密度を支えており、羅臼海岸はオオワシなどの絶滅が危惧される鳥類にとって重要な越冬地となっています。世界最大のフクロウであるシマフクロウは、羅臼の森に育つ高木に巣をつくります。ここを訪れた際は、ボートツアーや展望デッキで自然の生息地にに棲む地元の野生生物を目にすることができます。

UNESCO は、知床半島の健康な生態系のカギとして、季節要因による浮氷塊を挙げています。冬に羅臼の沿岸水域に流れてくる浮氷塊には、植物性プランクトンの増殖を刺激する栄養が豊富に含まれています。プランクトンは、羅臼の海洋生態系の基盤を形成します。ここを訪れた際は、ボートツアーやアイスダイビング体験で流氷を目にすることができます。クジラはほぼ 1 年を通して見ることができ、ボートツアーや沿岸の展望デッキから観察することができます。

知床世界遺産ルサフィールドハウスには、UNESCO 登録について説明している展示が用意されています。情報の一部は英語でも提供されています。ルサフィールドハウスは、世界遺産の境界線内に位置しており、羅臼中心部北側から車で 20 分ほどです。